

自己評価報告書

平成23年5月16日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008年度～2011年度

課題番号：20401019

研究課題名（和文）

リベラルアーツ教育における文学教育の歴史と可能性：国際的比較研究

研究課題名（英文）

History and Possibility of Literature Education in Liberal Arts Education:
An International Comparison

研究代表者

大西 直樹 (ONISHI NAOKI)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：80152198

研究分野：アメリカ文学およびアメリカ研究

科研費の分科・細目：人文学A・各国文学・文学論

キーワード：文学教育、リベラルアーツ、アメリカ教育史、ヨーロッパ教育史、高等教育制度

1. 研究計画の概要

1991年にいわゆる大学設置基準の大綱化がなされて以来、日本の多くの大学で教養課程が廃止され、英米文学や英語を広く扱っていた英文科という名称が日本の多くの大学から消滅し、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学などの専任のポジションも著しく激減してしまった。並行して、高校時代から受験勉強に集中する昨今の大学生にとってはますます文学作品に触れる機会が減少し、文学離れは顕著な現象として観察されるようになった。一方で、大学における文学研究は文学理論研究を中心に大きな変化を遂げた。こうした状況を反映して、大学の教育現場においては、高度に発達した文学理論を駆使する教える側と、文学作品に触れる経験のごく浅い教わる側との乖離は相当深刻になってきている。そのためか、どの大学においても文学の専攻生の数は激減している。本研究は文学教育がどのような姿をとるべきか。ことに将来、文学研究者になることを目指していない一般の学生にとって、文学教育はいかなる形をとったらよいか。教養学部あるいは教養教育において、どのような作品をどのようなスタイルで教えたらいのか、こうした問題をアメリカ、イギリス、フランスなどの諸外国、そして日本での現状を踏まえながら、国際比較し、あるべき姿を模索しようとするものである。その際、数量的あるいは統計学的な比較研究をめざすのではなく、長く教育の現場にたずさわってきた熟練した教育者から直接、経験談をとおして将来を見据えた知見を集めようと意図するものである。

2. 研究の進捗状況

初年度から海外からの著名な研究者、教育者を招いて、講演会およびシンポジウムをたびたび開催することができた。コロンビア大学のギャリー・オキヒロ教授、ワシントン州立大学のスティーヴン・スミダ教授、カラマズー大学のデイヴィッド・シュトラウス教授、オックスフォード大学のマルコム・デイヴィス教授、キャサリサンビー教授、スティーヴン・ハリソン教授、ハーヴァード大学のデヴィッド・ホール教授、ブリストル大学のジョン・リー教授、ボストン大学のアンタ・パターンソン教授、カルフォルニア州立大学のスーザン・クライン教授、サンテチエンヌ大学のセバスチャン・ミュリエ教授、フォーダム大学のジェームズ・マルーシス教授、パリ第三大学のピエール・エドモン・ロベール教授などの研究者と、現地あるいは、国際基督教大学で、研究分担者とともに直接対話を通じて具体的な問題を親しく語り合えた事は大きな収穫であった。様々な知見が得られたが、共通していえることは、学生がほとんど文学に触れる事無く大学に入学してくるが、その読書経験がますます狭くなっているというものだった。となれば、どういった代表的作品、あるいは古典的な作品に触れさせるかが大きな課題だが、古典的な作品理解がしっかりしているイギリスの大学とは違い、ハーヴァード大学ではその議論に相当の時間をかけたが結局結論がでなかったという、深刻で興味深い問題が披瀝された。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

ボストン大学での調査からもあきらかなように、文学作品を単なる作品分析や文学理論から研究するのではなく、具体的な手段、例えば、朗読とか演技などを通じて経験的に作品にアプローチさせる方法が今の学生には有効であることが分かってきた。その意味で演劇をどのように取り入れるかは一つの可能性である。カルフォルニア大学からは、オーディオ・ヴィジュアル教材が異文化理解にきわめて有効であることが示された。また文芸活動に直接関わっている作家の見方を取り入れる事も意味があると感じられる。つまり文学作品の分析もさることながら、文学を「する」要素、つまり体験として文学経験をもたせることもかなり重要な要素だという事の認識が定着してきた。ことに文学の専門家を目指すのではない教養学部の学生にとって、文学を体験する事の意味は、将来を考えれば計り知れない。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度をむかえ、アメリカにおけるいくつかの事例研究と現地調査を継続しつつ、これまでの知見を基礎に、いかに生きた形での文学を「する」教育を現場にとりいれるかを、今年のテーマに掲げ、共同研究者および、作家や演出家をゲストとして迎え、秋には活発な討論の場を設けて集大成としたい。幸い本学にはきわめて活発な作家活動、演出活動を実践している教養学部卒業生がいるので、その中から、奥泉光氏、平田オリザ氏、東北弁でのシェークスピアを演出している下館和也氏を招聘して、しめくくりのシンポジウムを構成する予定である。この三人は、多彩な文芸活動をしながらも、それぞれ大学で文学を講じている。その観点から現在の学生にどのように文学を体験させ、教えるか示唆に富む知見が披瀝されるのではないかと期待される。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 佐野好則 「『イーリアス』第 11 巻におけるネストールの物語」、『西洋古典学研究』、59 号、2011、1-10、査読有
- ② 佐野好則 「『ポリテイア』第 4 巻における正義の定義の背景」、『理想』、686 号、2011、14-23、査読無
- ③ 大西直樹 「キャンパスの中心にある対話の舞台」、『大学時報』、No. 335、2010、120-121、査読無
- ④ 本山哲人 “Living Art” Lost: 9:53he Arden3 Love’s Labour’s Lost and Shakespeare in Higher Education、『人文

論集 早稲田大学法学会』、第 48 号、2010、164-132、査読無

- ⑤ 岩切正一郎 「リンダ・バスロ」「ウィリアム・クリフ」、『ビーぐる』、3 号、2009、23-26、査読無

[学会発表] (計 7 件)

- ① 佐野好則 「『イーリアス』第 11 巻におけるネストールの物語」、日本西洋古典学会、2010 年 6 月 6 日、山口大学
- ② IKOMA Natsumi, Cultures at Intersection, Harvard Yenching Institute Literature Symposium, Harvard University, 1 May, 2010
- ③ 大西直樹 「戦後日本のキリスト教とリベラルアーツ」、キリスト教史学会、2009 年 10 月 21 日、国際基督教大学
- ④ 大西直樹 「エミリ・ディキンソンの語法」、日本アメリカ学会年次大会、2009 年 10 月 10 日、秋田大学
- ⑤ 大西直樹 「ソローの西へ向かう旅」、日本ソロー学会、2008 年 10 月 10 日、福岡大学

[図書] (計 5 件)

- ① 大西直樹 「エミリ・ディキンソンの語法」『エミリ・ディキンソンの詩の世界』、国文社、2011、408 頁
- ② 大西直樹 訳、バーナード・ベイリン著『世界を新たにーフランクリンとジェファソン』、彩流社、2011、209 頁
- ③ ツバタナ・クリステワ, 岩切正一郎, 佐野好則 (共著) 『人間に固有なものとは何か』、創文社、2011、290 頁
- ④ 岩切正一郎 訳、カミュ著『カリギュラ』、早川出版、2009、180 頁
- ⑤ ONISHI Naoki, “The Oxford Handbook of Early American Literature,” Oxford University Press, 2008, 636 pages

[その他]

- ① 岩切正一郎
2011 年 5 月、サミュエル・ベケット作『ゴドーを待ちながら』の仏語原作からの日本語訳完成。国立劇場小劇場にて上演され好評を博す。
- ② クリストファー・サイモンズ
2009 年、アカデミ・カーディフ国際詩作コンペティションにおいて二等賞受賞
受賞作「ピンク・ドッグ」